

【川瀬】 それでは、次に、株式会社ライフカルチャーセンターの澤登社長から御発言をいただきます。澤登さんは長年ソーシャルビジネスのプロデューサーとして御活躍されていますけれども、本日はその様々な御経験から、地域づくりの具体的な形と、それを動かす人材づくり。特に、先ほど私が申し上げました、高齢者が地域に軟着陸していく形の仕組みづくりとか、今また御本人がまさに携わっている具体的なプロジェクト等についても御紹介いただけるのではないかと考えています。



【澤登】 澤登です。今鈴木先生の整理されたお話から、私、楽天的で、おてんば娘と昔々言われましたが、そのまま樋口先生の10年後を走っております。そういう意味で、私もまさしく当事者として、どうやってこれからの自分が楽しく、明るく生き続けていけるかということ、真剣に考えなければいけないというところに当面しながら、挑戦を続けていきたいと思っております。

## ●高齢者の社会参加欲求

高齢者を捉えるときに、弱い者、庇護しなければいけない者と言われておりますが、私が5年前に長寿社会文化協会にいたときに扱った調査から、高齢者の捉え方をまず変えなければいけないと考えております。

それは、誰しも人間が根源的欲求として持っているものとして、誰かに承認してほしい、誰かに認めてほしい、あるいは何かの役に立ちたいという参加欲求、それから、誰かとつながっていききたいという欲求を根源的に持っています。幾つになっても持っている。

**挑戦するシニアが時代を開く**

多世代が支えあう地域社会に向けて

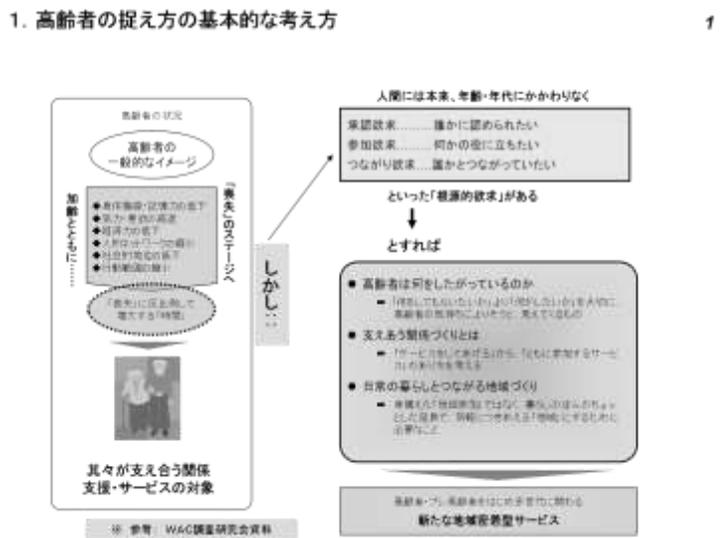
  

2015年7月31日

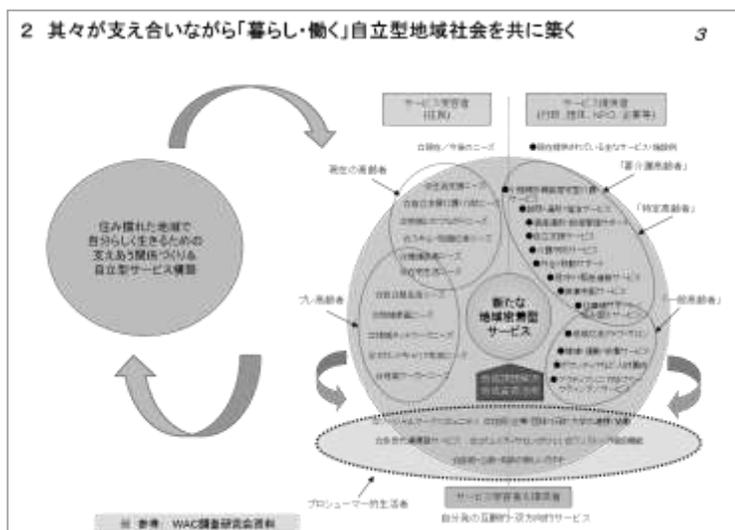
澤登 信子  
ソーシャルビジネスプロデューサー

たとえ身体が不都合なことがあっても、この欲求は持ち続けているのではないかとすることを前提としております。であるならば、高齢者と言っても何かをしたい、どういうことをしたらいいのかというものがあると思っております。でも、一人ではできなくなってきた。支え合う関係づくりをどうするのか。それから、日常の暮らしをどういう形で地域の中、あるいは仲間としてのコミュニティーの中でつながりを持ち続けていられるのか。



今鈴木先生のお話では、確かに元気な高齢者は増えましたが、50代、60代、70代、それぞれの気持ちと肉体がついていくところがどうも少しずつ違ってきている気がします。例えば地域のコミュニティーの中で活躍しなければいけないと言われても、そだよなと思いつつ、つついとおっくうだとか、自分が出ていいのか、ちょっと体がどうかという状況が変わってきているような気がします。私も70代に入って、つつい自分にむちを打たないとなかなか出ていきにくい。

そういう意味で、非常に一人一人、それぞれの高齢者は一概にはかなり変化している。と同時に、そこに一緒にいてくれる仲間がいたり、お互いに支え合っていくことで気持ちも明るくなったり、出やすくなったり、じゃ、行こうという気になります。こういう気持ちと肉体と環境というものが、それぞれ違ってきているのではないか。その中で、この根源的欲求というものを、それぞれがどう社会に参画しながら還元、還流できるのかということを考えてきております。



幾つかの基礎データは用意してきているんですが、今高齢者と言われている人々が一番不安に思っているのは、やはり健康問題と、先ほどのデータにも出てきましたが、経済的な問題です。

あと、どういう場があるか。私は、あえてここで、経済的な面をあまり高齢者が本音で、実際的にはあるんですが、こういうところでお金に関して、あるいは生活をどうしていくかという経済面での論議があまりなされていかないような気がしております。

### ●老後の経済的課題

それは、アクティブなシニアの前期なら、前期の高齢者のときには何となく、そしてまたそのまま行けばいいんですが、短く、あるいは長くかは、それぞれの状況によりますけれども、動けなくなったときの経済的な保障、あるいは自分がどうやって稼いで収入を得ていったらいいのかという、やはり最後まで経済的な課題というものをそれぞれが自分のこととして本当に計画を立てられるのかという、大変ハードルの高い問題がそこにあるような気がしております。

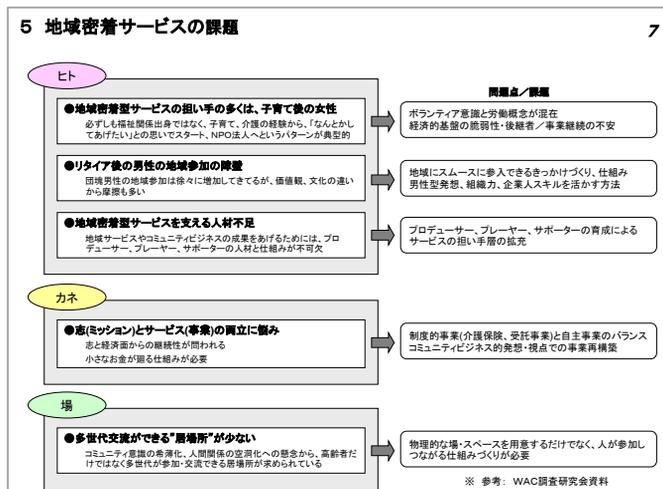


### ●女性企業家の悩み

私の周りには女性が多いわけです。しかも、私も20代半ばに就職が機会均等ではなかったために、じゃ、えいやっと会社を起したわけです。それで、もう40年以上たっています。私の周りにはそのような女性たちが非常に多いです。マーケティングをやったり、あるいは編集をやったり、小さな個人事業、あるいは小さなグループで会社をつくったり何かしております。この人たちは退職金もなければ、あるいは年金もほんとうに少ないんです。家を持つことは、会社が保証してくれてローンを組み立てられればお金を借りられる。

この人たちは退職金もなければ、あるいは年金もほんとうに少ないんです。家を持つことは、会社が保証してくれてローンを組み立てられればお金を借りられましたけれども、女性の多くはそういう状況にない。しかも、何か自立してやっていこうと考えて40年、あるいは20年、30年やってきた人たちは、今大変切実な問題として受け取っています。

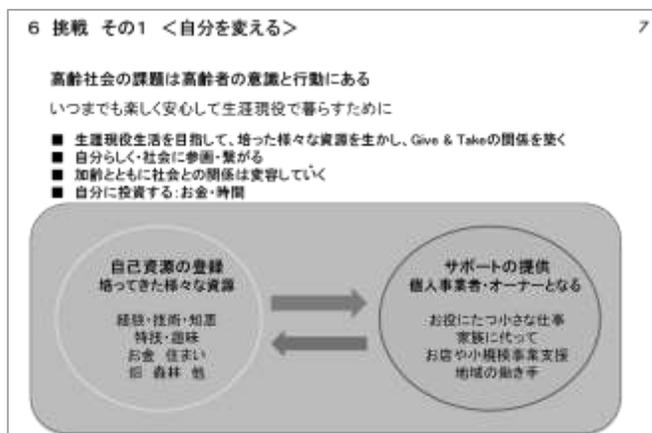
それで、現在50代になった女性たちから、去年、このままでいったら、本当に生涯現役で暮らしていくんだろか、どうやれば収入の道があるんだろうかということを実際に考え出しました。今私の周りには、若いときから個人事業者になった女性たちが集まって一緒にプロジェクトを組んだり、この指とまれして仕事おこしをしていくと。世の中の大企業や何かを中心にした大通りにいることはなかなかできなくなってきましたね。高齢者だからと、横丁に寄せられてきています。



## ●スマートエイジングネット— 自分を変える

その横丁、脇道だとか、路地のおもしろさ、小さいからおもしろい、小さいから通じ合える、一緒に仕事できるという関係を自ら作りたと思って立ち上げたのが、スマートエイジングネットというものなんです。これは、生涯現役で働き続けていくためには、今までの自分が培ってきた様々な有形無形の資源をまず出して、それから受け取ろうと。ギブ・アンド・テイクでいこうと。お金というものは、商品を作らない限り回りませんから、まず自分たちの商品を作ろうじゃないかと。

それは、当事者である50代、60代、70代でも、どんなものが不足しているのか、どういうものがあれば安心できるのか、そういうことをそれぞれが得意なものを出し合って、商品を作って、その後お金を取ろうという、ギブ・アンド・テイクの関係で、互助の仕組みをベースにしながら、世の中では高齢者の雇用創出だとか、就業だとか、いわゆる雇われるというところから発想していますが、



私たちはもう雇われまいだろうと。自分の思ったことをなかなか認められない。だったら、作り上げたほうが早いと。自分の得意なものでお役に立って、しかも、小さなお金でも回り続けていられればいいのではないかと。ということで、挑戦のその1として、自分を変えてみると。

多分男の人たちも多いと思います。やはりこれまで経済社会で活躍なさった方が、頭の中では地域の中に入って何かやろうとは思いますが、なかなか時間だとか、いろいろな状況の中でわかっていてもできないのが、ある面地域社会ではないかと。入れればいいんですけども、変わらないと、今コミュニティは女性カラーで染まっていますから、男性は多分居にくいと思います。男性たちがバックヤードに入って、それで地域社会、あるいは、小さな仕事を全うするために新しい関係が作ればいいと思っています。

企業社会で得た文化で、女性の前を歩いて事の決定を男性たちに任せたくないというのが女性の本音です。なぜならば、男の人たちが悪いというわけではなくて、生活者としての非常に日常的な家事だとか、いろいろなものがつながりながら俯瞰して、総合的に判断しなければいけない状況に立ったときに、男の人たちは訓練を受けていません。まだ女性のほうがよほど介護をしながら食事を作る、いろいろなことができる。

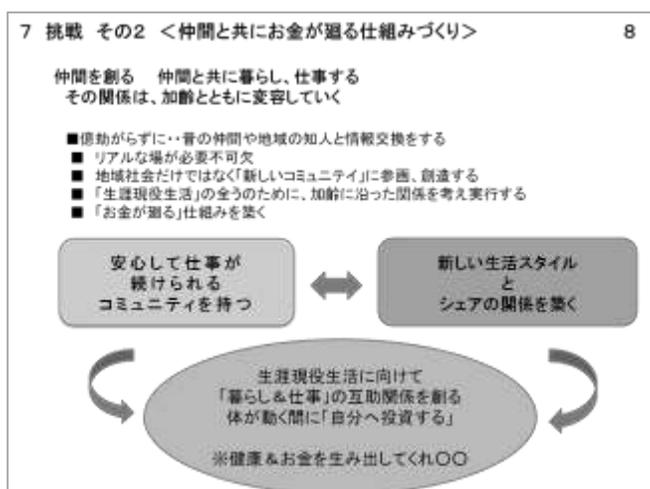
わからないことを、ただただ男だということだけで決定してほしくないというのが、それは男の人と女の人の戦いではなくて、これからの高齢社会はどうなっていくかということが見えていないじゃないかということなんです。ですから、男性たちの培ってきた知恵とか、マネジメント力というのは大いにこれからの社会、コミュニティの中では必要ですし、また、プロジェクトを作るときには大変重要な役割を果たしますが、昔の金券にかかわるという形で先頭を切らないほうがお互いのためになるということから、私たちはスマートエイジングネットということで、いろいろな自分の持っているもの、お金もそうですし、家とか、あるいはふるさにとに残してきた田畑含めて、社会にこれから還元していく1つの資源として提供していただけないかなと。それで、お役に立つ小さな小さな仕事を、お互いに作り上げていくと。小さいほうが非常に質の高いものができると思っています。

## ●社会に還元する暮らし方

東京のこの消費の文化が蔓延し、消費の文化を基盤とした中で、お金を得る額が少なくなってきた高齢者が生き延びていくことは、かなり私はしんどいことだと思っています。自給自足を原点にしながら、もう1回、消費の文化ではなくて生産の文化、何かを生み出す文化に時間と今まで培ってきたものをお互いに還元できれば、もっと動物としての野生も、もう1回目覚めてくるでしょうし、都会の中ではマンションの1室でクリエイティブなことをしようといっても、出ていく場がないわけです。一緒に汗を流して作り上げるということが、環境的には私は東京の中ではかなり厳しいなと。何事でもお金の換算され、お金でなければ非常に不安が大きくなるということを含めて——国が高齢者を外に出すのかよと怒っている方もいらっしゃいますが、これをチャンスにいいようにとって、お金がなくても、もう一度暮らしというものを作り上げていくには、東京にしがみつくことなく、ちょっと郊外のほうに行けばいろいろなものが余っていると思います。それを今まで培ってきた知恵とか技術を生かしながら、楽しく、しかも、そこには年齢を超えた人たちが集まってくるのではないかと考えております。

## ●お金が回る仕組みづくり

私たちが今挑戦のその2として動いておりますのが、仲間とともにお金が回る仕組みづくりをどうやったらできるのかなと。おっくうがらずに、昔の仲間やいろいろな知人と情報交換をしながら、今ITだとすぐそっちの世界に行くんですが、リアルな場がどうしても私は必要だと思っています。



気持ちを確かめ合ったり、ああ、これだったら自分は得意とするから提供できるだとか、いろいろなものをリアルな場で、小さくてもいいから、必ずしも地域のご近所さんとともにでなくても、昔の仲間たちともつくれるのではないかと。そういう意味で、新しい高齢者のライフスタイル、あるいはワークスタイルをこれから生み出していくには、共助というか、つながっていく、シェアできる関係をどう作ったらいいかと。すぐ国に対して公助という形で考えがちですが、まず、身近にいる仲間たちと何ができるのか。認め合っていくためには、得意としたものを出していくと。そういう形で、やはり挑戦その2としては、自分自身に投資しなければだめなような気がします。何も投資しないで、どこかいいものが落ちてこないかという受け身の姿勢だと、何も生み出さないのではないかなと。誰しも、どこか何か培ってきたものがあるわけですから。例えば健康に対しても投資をすると。勉強に対しても投資。元気なうちに自分に投資をすることを、まずしたらどうなのかと。高齢者は誰かがどうしてもやってくれると思いがちですが、根源的欲求から見ても、自分が生き生きとするためには、まず自分がつながりたいんだと、自分が何かして、ああ、お役に立ったなという満足感を得たいですね。仲間が増えることで、気持ちの上でも明るくなりますね、不安がなくなる。それから、少しおしゃれもしたいなと思ひ出します。

●「投資」から始まる

私どもが言っているのは、おしゃれをしましょうと。みんなおしゃれをすることで、ちょっとおしゃれをする、ちょっと買い物をしてみたくなる。どんどん善循環になっていきます。だから、大きなお金でなくても、投資から始まったら何かが見えてくるのではないかと。先ほど鈴木先生のお話の中からも、やはり女性は骨とか筋肉がというんですが、私の仲間から聞いた情報ですと、アメリカでは足の大学というのがあるらしいんです。いわゆるしっかり歩くために3Dで足をはかって、インソールというか、中敷きをつくって、どの靴にもそれを入れかえて履けばいいんですが、ものすごく安定して歩きたくなるんですね。つえをついている方も歩けるようになります。それは少々高いんですが、その歩けるために、じゃ、インソールをオリジナルにつくってもらうんです。そうすると、また全然気分が違ってくるんです。例えばですね。

●小さな投資が大きな潮流へ

そういう意味で、自分に投資をして仲間と一緒にお互いさまで、小さな仕事をすることでお金が回っていく。あるいは、小さな渦がいろいろなところで始まることで、全体にお金が回ると。私どもが女性を主体として30年間の女性たちが、家を持っている人たちも多いもので、最後、おばあさんが家を持つとすると、30年間の人たちの1割の住宅を動かすことで100兆円が動くという計算を、私たちはしました。いわゆる、その家をストックされているものからフロー化するにはどうしたらいいか。持ちちゃって、孤立して、困っちゃうと。国の施策としても、住まいは非常に日本の高度成長を遂げた非常に大きな要素だったわけですが、それが余っちゃっているわけです。2,000万ぐらいのものを結構細かい計算をして、それで我々、中高年の女性が言い出した

